

森田恒友 西山泊雲宛書簡 翻刻(一)

増 測 鏡 子

大正八年六月十九日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山亮三様

東京市外代々木山谷一一一 森田恒友

拝啓 過日御手紙を頂き候に遂々御返事を怠り失礼致居所 今日再び御書簡を拝し恐縮に奉存候 昨今霜雨連日の折からご清適の趣奉賀候 過般御拝芝の後迂生あちこち山野をうろつき廻り□居にて 一向に落ちつきて筆採り候日も無之打過し申候 年々首夏の候はなんとなし日を送り候事 多く 汗顔の至りに不堪候 さて過日御手紙を拝し候のち実は未だ山名氏に面晤の機なく打過し存申候も先般来福岡の方に出張忙殺され居る由 承り居り最早近く帰京をさるべく会晤を得ること、存居申候御預かり相成居画帖補遺の儀、遅延失礼に御坐候 愚作百穂氏の「稍練」の傍らに差出で候事甚だ僭越の感深く候も何れ相認め可申 何分遅延御仁恕奉願候 七月初旬には御来京の趣 其頃は迂生も大抵在宅可居筈に存じて お立ち寄り被下べし呈上候 先日取急ぎ御返事傍伺貴意度乱筆御無礼仕候 拝具 六月十八日 恒友 西山泊雲様 玉案下

大正八年十一月三十日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山亮三様

東京市外代々木字山谷一一一 森田恒友

拝啓 先般中は度々御手紙を頂き有難奉存候 過日御来京の折御拝眉得られ候事と相楽しみ居候ところ急に御帰西の由あとより山名氏より伝参遺憾至極に存候 愚作画帖ご依頼の儀愚筆御了恕被下度 平福さんの分如何御返事哉 又序文も定り候はゞ御満足被下候はゞ 嬉しく奉存候 本日山名氏を通じ拝承いたし居候より遅延いたし居り申し障無之近きうちご覧を願ひ度考慮いたし居候 御くれぐれ悪しからず御宥し被下御様奉願候御詫旁伺貴意候 勿々不一 十一月二十九日 恒友 西山泊雲様 御机下

大正八年十二月九日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山亮三様 御直

東京市外代々木山谷一一一 森田恒友

御手紙拝見仕候昨日鳥渡平福さんに面晤御手紙の件 小生より相願申候「何とか相考置可申何れ御面晤の折相運び可申由」申居られ候就ては此次御来京の折御持参被下度 題字の方小生には一向注文は無之 内藤先生も□□先生も亦芋銭氏も結構に有之 之も平福さんに御面晤の折御相談被下ば結構に存じ申候 誠に甚しき愚画の為に諸先輩を煩はし御事喜

悦に不憶候も亦恐縮千万の事に御坐候。さて御地の御尊承り居り参遊の意ありながらなかなか意に任せず若葉の頃にも一度山陰一带を見度とも存じ居申候。小生の如き野人は都よりは山野がよろしく候も何処も冬の寒さには御籠居の外無之候。先は御返事傍得貴意候。敬具。十二月七日。西山泊雲様。玉机下。

大正八年十二月二十六日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山亮三様 御直使

東京市外代々木山谷一一一 森田恒友

拝啓 今年も余日なくお忙しき御事と奉存案候。さて過日は御珍らしき黒豆御恵送に預り奉拝謝候。過般御手紙の御様子にて年内或は御来京御拝眉の事かと存じ遂々御札打怠け遅延失礼仕候。小生春は十日頃まで不在に仕べく候へども其後は大抵在宅の筈に有之候間御立寄奉願候。不取御礼のみ如斯御坐候。敬具。十二月二十六日。恒友。西山泊雲様。御机下。

大正九年一月六日消印（はがき）

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京市外代々木山谷一一一 森田恒友

賀正 大正九年元旦

大正九年四月四日消印（口絵）

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山亮三様 御直

東京市外代々木山谷一一一 森田恒友

拝啓 度々御手紙を拝し候処遂々打怠け御返事も差出さず失礼に打過し申候。昨今不順の折から御障りも御坐なく候や画帖題字の事全く小生の怠慢に有之御詫申上様も無之候。実は平福さんに凡て御ませ申度と存じ居候間今度御返送の折は打ふさかり可申かと愚考仕居候。何卒不悪御了恕被下度。罪は私に有之候間唯々御詫申上候。山名氏を通じての長幅の方も遷延のしまつにても之れも近きうちには御目にかけて度念致し居候。近來何やら氣重く筆とること少なきところへ期日ものなどにせかれ不本意の御無音にて申訳之無候。御詫傍間度得貴意申候。草々。四月四日。恒友。西山泊雲様。御侍史。

大正九年七月一日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京代々木山谷一一一 森田恒友

拝啓 大阪よりの御手紙只今拝見大に恐縮に感じ申候。小生奈良附近に彫刻など見るべく二十三日に奈良参り月末にはぜひ帰宅せねばならぬこと有之為に二十七日に帰宅仕候。尤も電報を頂く様の手順に相分り居り候へばもう一日止り其上にて一日にても二日にても御邪魔に参上すべかりし筈と打悔み申候。態々奈良へ御越し被下候事何とも恐縮に存候。二六日に山名氏より電報を得ざりし為打あきらめ候事にも一つはもう少し早く家を出で仕らば独りにても御邪魔致さん考えも候へしが。目伊者（奈良だけ）の都合にて延引いたし居候にて候。何分此度のところ不悪御ゆるし被下度。必らず参上の機を得度楽しみ居申候。此度残念にも機を失し候間。今次参上は成るべくゆるりと致さば。時候慮申度存じ念いたし居申候。いろいろ申上度候も不取御詫申上候御宥察奉

願候 敬具 七月一日 恒友 西山泊雲様 御机下

拝啓 御令室御病氣其後如何に候哉 御尋申上候 さて二十六日に奈良を立ち候あとに西山氏態々奈良へ御立かけ被下候とのこと 今日御報に接し唯々恐縮千万の事に存じ もう少し早く家を出で仕らば独りにても十二日御邪魔せんかとも考居り候へしが 何分此度は機を失し残念に候 何れお目にかかり万謝申上候 小生六十七日頃まで在宅の筈に候 御令室御大切に御遊度念上候 七月一日 恒 山名一二様 (西山宛書簡に同封されていたもの)

大正九年八月二十二日消印 (はがき)

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京代々木一一一 森田恒友

拝啓 残暑きびしく候処御清適賀申上候 先日は態々御手紙にて反つて恐縮し存上候 愚画粗扇御使用を得ば幸甚に存候 展覧会も毎年定まり仕るは不自由の点も有之候へども 責任も感じこれにて遂に御無音不悪奉願候 草々 八月二十二日 山名氏目今帰郷のことと存候

大正九年十月四日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲殿

拝啓 小生共感ずる處ありて此度日本美術院を辞退致候茲に従来美術院洋画部に対する御高誼を謝するに臨み各位の御多祥を祈り申度右御挨拶迄 敬具 大正九年十月一日 小杉未醒 倉田白羊 長谷川昇 森田恒友 山本鼎 足立源一郎 西山泊雲殿 (印刷)

大正九年十月二十五日消印 (はがき)

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山亮三様

東京代々木一一一 森田恒友

拝啓 漸々秋深相成申候 さて今月三十日頃山名氏同伴此度はぜひ御邪魔申上度 実は二四五日の御約束に候処どうも例の延引のもの持来せねば心苦しく為に遅延のしまつに有之候 参上の折は必らず持参仕候 御笑被下度候 近々御拝眉万謝申仕候 不一 十月二十五日

大正九年十一月五日消印 (はがき) (口絵2)

丹波水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

丹後久美浜古谷にて 三人

丹後にて 恒 九年十一月四日 (水彩画)

大正九年十一月八日消印 (はがき) (口絵3)

丹波水上郡竹田村中竹田 西山亮三様

恒

今日山名氏に分れ竹野に止り申候 幸に好晴につき一枚出来そうに有之候 九日夕五時竹田着にて再び拝眉致度存居候 竹野旅舎にて 十一月七日 竹野川 恒 (水彩画)

大正九年十一月十七日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京代々木一一一 森田恒友

この度の拝参御所用中御邪魔申上且つ種々御厚情に接し誠に嬉しく御礼申

上候 殊に里山に去来する雲煙の景は小生の始めて目撃せしところにて  
自分の進路に一つのを加へ候様相覚え嬉び申候 小生昨日午後着宅  
いたし小屋の縁に日南ぼっこしつゝ、めつきり東京の寒く相成りしことを  
感じ申候 奈良の秋も存外によろしく 春日裏山のアたりすゝきの穂白  
くなく、画意動き候為め 二日を巡り手帳スケッチを試みて参り候  
一日は秋篠唐招提寺の辺をうろつき申候 天平初期の彫像は小生の脚を  
奈良に運ばせる最大のものに御座候 あゝの渾然として大なる温かき芸術  
は何故彼期以後消滅せしものや など毎日想ふことに御座候 扱て  
先日御約束申上候愚作横物 今朝書齋をかきまわし候ところ出で参り申  
候 今更あまり進まぬことに候も御約束にもあり 先日申上し通り画稿  
同様の意味にて兎も角御目にかけて可申両三日中發送申上べく候 来年は  
ぜび、晩春初夏の候に頼し申度候 御邪魔も申度 又一人黙然と山に  
向ふ快も楽しみにいたし候 末乍御令室様にも宜しく御鶴声御下度願入  
候 敬具十一月十五日 恒友 西山泊雲様 御机下

大正九年十一月二十二日消印(はがき)

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山亮三様

拝啓 昨日閑庭御贈申上候 御笑覧願上候 小生帰来病父看病等に日を  
送り居り落ちつき不申失礼致居候 今日御手紙拝見致し未だ其後山名氏  
に面晤不仕候 十一月二十一日 東京代々木 森田

大正九年十二月十四日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山亮三様

東京市外代々木山谷一一一 森田恒友

拝啓 急にお寒く相成り当地にも過日八寸ほど積雪庭の外未だ解けやら  
ず候 小豆御恵送難有拜手仕候 毎度御懇情奉謝候 漸々押しつゝまり昨  
今なんや彼ややらねばならぬもの堆積すればするほど手をつけることお  
つくうに御坐候 過般三丹の印象ホトトギス新年号うめ草稿出来候  
画十枚、下に小文を附し申候が山名氏に相談致せしところ竹田を御訪ね  
せし翌日からは小生一人にてうろつき候事にして下らぬ小文を附し申候  
間御了恕被下度願上候(あの当時のご都合もありし事と存候間)取り急  
ぎ鳥渡御礼旁々得貴意申候 十二月十二日 恒友 西山泊雲様 御机下

大正九年十二月十五日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山亮三様

東京市外代々木一一一 森田恒友

御手紙拜手仕候又御状中の百金もたしかに入手申上候 之れは絵巻の分  
との御事 毎も愚作遅れ仕り汗顔に存じ居候際 前金頂き候事甚だ心苦  
しき事に有之候も兎も角御預り申上置候 実は長さも未だ成案無之 何  
卒もう少し御有免なし被下度奉願候 今年も漸く押しつゝまり御忙しき事  
と察上候 よき御越年御遊度希上候 日の過ぐる事誠に早く小生も年末  
中何かと筆とらねばならぬもの堆積閉口いたし居候 先日信州の旅四日  
程に候へしも島木赤彦氏と二日蓼科の湯にくらし参り申候 今度はじめ  
て信州のよき方面親しき方面に接し申候 前便申上候事御高念 何分願  
奉り候 とりあへず御返事迄申上候 十二月十五日 恒友 西山泊雲様

大正十年一月六日消印(はがき)

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京代々木一一一 森田恒友

賀正 十年第五日 御手紙拝見仕候 昨秋は大へん御厄介失礼仕候 帖  
のこと拝承 其内何か御目にかけ申し度候

大正十年二月七日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京市外代々木山谷一一一 森田恒友

拝啓 其後御無音申上失礼仕候 さて昨日酒粕御恵送に預り拝手申上候  
毎度御厚情歓喜の至りに奉存候 過般竹田の景御写生文面白く拝読 小  
生には殊に思出深く存じホトトギス中央美術等の新年号愚文は大に御迷  
惑なりし御事と恐察いたし申候 画人には言論は無くとももの事につき成  
るべく遠ざかり仕候も折々責めふさぎをいたし愧入申候 一昨当方も雪  
に相成七八寸に至り申し寒さきびしく相成申候 今年は寒明けが反つて  
きびしき事かと存候 冬季は小生殆んど病人様にいぢけ正月来何も致さ  
ず誠に困り申候 木の芽の頃とも相成候へば御参遊仕上度候 御礼のみ  
如斯御坐候 敬具 二月六日 恒友 西山泊雲様 御吏

大正十年三月十五日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様 御直申

東京市外代々木山谷一一一 森田恒友

拝啓 過日は御手紙難有拜手候 春寒尚料梢御清適の御事と存上候 房  
総帖は全く小生の怠慢、御詫申上候 近きうち御送り出来るよう可仕何  
分不恵奉願候 出来候へば三丹帖を先へ御目にかけ可申かとも愚考いた  
し居候、何分とも御了察祈上候 五月頃御来東の由山名氏より伝聞いた

し居候待上度候 昨今関東の村に梅満開漸く春の訪れし感有之候 敬具

三月十五日 恒友 西山泊雲様 御侍吏

大正十年消印不明(はがき)(口絵4)

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京代々木一一一 森田恒友

拝啓 過般は失礼仕候 暑中御障りも御坐なく候や 小生今夏は引籠り  
秋出勤の心得に候 暑中御自愛祈奉候 七月二十七日  
十年 猛夏 恒友(水彩画)

大正十年九月九日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京市外代々木山谷一一一 森田恒友

御手紙拝見仕候 やうやく新涼を覚候折から御清適賀上候 久しく御消  
息に接せず候ところご健勝とき、安んじ申候 今秋御地方巡りのこと山  
名氏よりもすすめられ居候 成るべく実行いたし度と存居候もいつごろ  
発運いたし得られ候や 今のところ決しかね居るしまつに候 昨今当方  
も何かと賑はひ居り院展も相当多数出品揃ひ居申候 今のところ小生ど  
もは骨休めに楽々見物くに相成居申候 御書中山名氏の会の分誠に愚作  
汗顔に存じ御了願入候 取あへず御返事迄 勿々 九月九日 恒友  
西山泊雲様 御几下

大正十年十月十五日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様 御侍吏

東京市外代々木山谷一一 森田恒友

拝啓 愈々秋も深くなり行き申候処 御障りもなき御事と存上候 本月  
来の霧雨漸く晴れいで御間 之れより心地よき野山を見んと楽しみに  
いたし候へしが 兎角何かと気がかりのことつかひ居り遂、旅心をにぶら  
し申候 今秋九州より御地方面再遊の企ては断念いたし申候 尤も冬に  
でも相成実行いたすやも知れず候も 差し当り延期のことに仕候九州山  
陰を廻り候へば月余の旅と相成(その位日が無くては面白からず候) 只  
今のところ長く家を空け候事困る事情有之にて候 依つて今秋は関東の  
小旅行にてあきらめ可申と存候 毎も御すすめ下さるに申訳なき心地に  
候も御了察願上候 山名氏の会のものも未だ少しのこり居り之れも近く  
相済むよういたし度候 目今関東の野 もなか／＼よろしく候 近く四  
五日出かけ申度候 鳥渡御詫旁得貴意申候 草々 十月七日 恒友 西  
山泊雲様 御几下

大正十年十月二十二日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様 御直

東京市外代々木山谷一一 森田恒友

御手紙拝見仕候 御待下され御事と誠に恐縮に存候 前便申上候ように  
今秋関西に旅立ち候はばぜひ月余の日数を欲し居り候為め 何かと心に  
かかり候ことをのこしてはよふ結構し得ず 少し延引の楽しみにいたし  
をき申度 何卒御了察願上候 昨秋の今頃も思ひいでられお目にかかり  
度万しに候も何分にもご寛恕願上候 毎度御訊ねに預ります病人の方早  
急にどうと申すことは無之模様につき 御安慮被下度唯々毎度の手術を  
見ること少しづらき義に御坐候 申遅候 松茸多分に御恵送被下難有存

じ大好物連日賞味厚く御礼申上候 又御手紙に御封中の百金入手申上候

兎も角御うけ申上置候 愚作遅延致し重命に感じ申候 万謝申上候  
取急ぎ 御礼旁御返事のみ申上候 敬具 恒友 西山泊雲様 十月二十  
二日

大正十一年一月四日消印(はがき)

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京市外代々木一一 森田恒友

賀正 大正十一年 元旦

大正十一年五月二日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京市外代々木山谷一一 森田恒友

拝啓 若葉の候と相成申候 参遊の御約束ありしこと思ひつつ日を過し  
居申候 山名氏の談に近く御来東あるやに聞及び申候何卒御いで被下度  
久し御話し致し度ことも有之 此度はちとゆる／＼お目にかかり度事  
と存じ申候 何日頃に候やお漏らし被下候は幸甚に御坐候 鳥渡訪貴意  
申候 草々 五月二日 恒友 西山泊雲 様御坐下

大正十一年十二月三十一日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京市府下中野上ノ原八〇五 森田恒友

新春御目出度存候 昨冬は御手紙頂き御返事怠り失礼申上候 又御封中  
の金百もたしかに拝手 責任御重ね候感にて汗顔に存候 黒豆も拝手

毎も御芳情唯々御厚礼申上候 小生昨夏画室を作り候も何処落ちつかず  
日を過し候 今年は少し元氣を加へ居り何かお目にかけて得べく候 敬具  
大正十二年第一日 恒友 西山泊雲様

大正十二年一月九日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京市中野上ノ原八〇五 森田恒友

拝呈 つまらぬ小画御送り申上 御懇書御丁寧の御言葉に接し唯々汗顔  
に存候 実はず昨年頃より平素極く御懇情を願ふ二三の方へ唯其当時の作  
風を記念する意味にて(表現の風を記念する意にて)お目にかけて置く気  
になりたるにて他意なき作に候 極くく軽く御心にて御笑覧願上候  
昨秋度々御懇書を拝しながら御返事怠け申訳なきことに候 昨一年は特  
に五月頃よりは移転やら不健康やらにて仕事も致さず怠け居り 御無音  
も重ね候しまつにて 慚愧の至りにて候 今年は少し元氣もいで候間昨  
年のうめ合せいたし度存念に候 加へて春陽会と申す会、昨春の成立、  
小生も発起者の一人として責任も感じ居り油絵も作るべく存候 此の月  
末か二月の中久々にて一度御地へ参り度き意も候 尤も万一都合出来ぬ  
折は五六月には必らず御地にて拝眉を得たく候 都合に候 成るべくは  
雪のうち御地に一度接して見度くも存候 今冬寒気殊更のように感ぜら  
れ候ご自愛祈上候 敬具 一月九日 恒友 西山泊雲様 御坐下

大正十二年二月十七日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京市外野上ノ原八〇五 森田恒友

拝啓 多忙去り難き折からお障りも御坐なく候や さて二月になれば参  
遊出来可申かと前便申上置候に又々都合悪しくなど申上ては申訳もなく  
残念にも存候も何分何処気忙き心地に打過し 遠方旅もう暫らく取払ひ  
度何卒事情を了察御恕候被下候よう奉願候 五月か六月にはどうでも大  
阪へ参ること相成べく候 其折は必らず拝眉相楽しみ申候 さて愚作  
一葉先般小展覧会へ出品せしもの山名氏の方へ御送り方托し申候 小生  
参上の代りに愚作御用聞のような意味にて 相存候申上候 妙な申分な  
がら御気安く御需め奉願候 山名氏の方の会の分 鋭意勉強致候 執筆  
ずみに相成候 御手元へはどんなものとなり候や愚作のみにつき心もと  
なく候も唯々 御了察乞上候 遂々手紙差上ることおつくうに致し失礼  
に相過候 時下御自愛聞 一々折上候 草々 二月十七日 恒友 西山  
泊雲様 御坐下

大正十二年四月十一日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山亮三様

東京市外中野町上ノ原八〇五 森田恒友

拝啓 小菊の花を御恵送に預り難有御礼申上ます 先年御地であちこち  
に可憐な花を見、熱望して居りました さっそく御礼申上る筈の処あち  
こち写生にうろつき居り両三日前帰宅のしまつにて延引不悪願上ます  
二三株ちとあやしく候が五六株は生き返りました、幸にあかと白と黄と  
が勢よくなつてくれるとよいと存じます。花は可憐なるを小生愛深く存  
じます。寒菊も結構に御待して居ります。花をおねだりする心を御笑ひ  
下さい。勝手ながら遠方よりのおねだりにつきどうか苔で充分に根をお  
包み下さるよう願申上ます 次に山名氏は未だ御地滞在に候や伺上候

実は其後ちつとも見へませんからどうしたことかと案じて居ります  
とりあへず御礼旁得貴意申上ます 勿々 四月十二日 恒友 西山泊雲  
様 御坐下

大正十二年五月五日消印(はがき)

兵庫県氷上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京中野上ノ原八〇五 森田恒友

御手紙拝見仕候 春陽会も昨日漸く招待日、今日開会第一日に運び申候  
今月二十七日までを東京、来月中旬大阪開会と決定いたし候、小生も来  
月は大阪へ参り申候 其折はぜひ拝眉の心得に候、とりあへず御返事の  
み申上候 まだ両三日多忙にて乍失礼右要用御返事のみ申上し候 不一、  
泊雲様

大正十二年六月十九日消印(はがき)

兵庫県氷上郡竹田村中竹田 西山亮三様

大阪大川町西照庵にて 森田恒友

先日は失礼申上候 二十日か二十一日には参上の筈を急用事出来仕候間  
二十三四日に参上のよう可仕と存じ何卒不意願上候 何れ決定の上も一  
度申上候 勿々 六月十九日

大正十二年六月二十一日消印(はがき)

兵庫県氷上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

二十四日に参上出来そうに候 今夕京トに参り二日を費し可申候 拝眉  
の上申し 二十一日

大阪東区大川町西照庵 森田恒友

大正十二年十二月二十一日消印

兵庫県氷上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京市外中野上原八〇五 森田恒友

御手紙と御封中の兌換券と拝手申上候 貴下には画償を負ふことになり  
お目にかけてべき愚作は遅延のみ、汗顔のことに候 御心易しで兎も角拝  
手申上置候 最早年末に迫りて何とも致し方なくことに御坐候も 今秋  
参遊のこと中止になりしは殊に残念に存居候 小生山陰の風光を静かに  
賞して見度念願 必らず相果し可申し候 震災の影響は出遊を妨げ候  
のみならず何かと身辺に俗事ありて閉口の事に候 早々大正十二年を送  
り至りものに候 よき御越年念上候 草々 師走二十二日 恒友 西山  
泊雲様

大正十三年一月四日消印(はがき)

兵庫県氷上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京中野上原八〇五 森田恒友

年頭御慶

御手紙拝手申上ました、会の方何卒御継続願度 又御心持のほどよく了  
解いたしました何れ方々 十三年一月元日

大正十三年一月十九日消印(はがき)

兵庫県氷上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京府中野上原八〇五 森田恒友

拝復 度々の地震におびやかされ候も此度は被害も僅少 乍憚御安慮願  
上候 地震も最早大い打ち切りなるべく、御同様今年は幸多き年にい



たし度候 寒中御□□祈上候

大正十三年三月九日消印（はがき）

兵庫県氷上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京府中野上原八〇五 森田恒友

御手紙及び御封中のもの たしかに拝手いたし候 只今寸閑なく失礼いたし候 小閑次第いろく申上候 とりあへず 勿々 三月九日

大正十三年三月二十二日消印

兵庫県氷上郡竹田村中竹田 西山泊雲様 御直

東京府下中野町上原八〇五 森田恒友

拝啓 先日は御手紙及御封中の会費たしかに入手申上候 其の折多忙の日を過し申訳なき失礼御了恕願入候 今年の春陽会は震災後の状態、程々手造りの事多く 未だ目録もお送り出来ぬしまつに候 明後日東京閉会

三十一日より京トに十日間 其後大阪に開会の筈に候 さて御言葉有

之候の出品は御愧かしきしまつ ながなが今年は墨画素描小品のみと相成一点の水墨有之候のみ、実はもう一点の水墨作間に合はず候間 大阪陳列の際出陳の心得に候 就てはそれを貴下へと存候 京トまでは余日なく候間 大阪開会の折何卒後一見被下度候 小生も成るべく下阪仕る心得に候 委細は拝眉の折万縷可仕候も 大阪は四月下旬大毎社楼上と相成るかも知れず 会場未定のしまつに候 近々確定御報申上候 展覧会も何かと心づかひの事多く平素閑々なる小生閉口のこと多く候 其後御病状如何に候や御案申上候 例の旧作画帖も近きうち何とか事運ぶよう仕度存候 とりあへず 勿々 三月二十二日 恒友 西山泊雲様 御

几下

大正十三年四月十五日消印

兵庫県氷上郡竹田村中竹田 西山泊雲様 御直

東京府下中野町上ノ原八〇五 森田恒友

拝啓 先日は御手紙難有存じました、病人のこと御心配被下御礼申上ます、実は義父又例の病氣再発小宅にて療養（三ヶ月来）幸に経過はよろしいのですが、何分病人を抱へて居りまして仕事思ふよう出来ず、其ために春陽会への出品も、漸く素描のみのしまつでして、先便貴下への分を大阪展へぜひ出品し度申上ましたところ、右様のしまつで、一向落ちつかぬものですからとうく今日まで出来ずにしまひました、私は十六日の夜行で大阪へ参り、（大阪は十九日招待日、二十日初日）、何や彼やと心忙しく、御言葉に甘へて誠に汗顔に存じますが、右様のしまつにつき何分とも御仁恕仰ぎ度存じます、幸に大阪で拝眉出来ましたら万縷申上度存じます、十八、十九は大毎へつめかけます、（会場は大毎楼上です）宿は、元の大毎社前、大川町、西照庵といふ小さな宿屋です。二十一日に京トへでもご同行一日ゆっくり御清談の上、御別れ出来れば嬉しく存じます、参上出来ればお宅へ参りますが（病人の都合で一日も早く帰宅の心づもりです）委細は拝眉之上申直度 其折御託申上度存じます 取り急ぎ 四月十四日夕 恒友 西山泊雲様

大正十三年四月十九日消印（はがき）

兵庫県氷上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

大阪東区大川町西照庵方 森田恒友

拝啓 小生昨日大阪へ参り申候 此度は家の事情にて一日早く帰宅のことに仕度乍残念御伺いもしかね申候 大阪の用事の都合にて二十二日まで滞在のことと相成候 二十一日 京卜にて□□□御拝眉し度存じへし  
が右様の都合に相成失礼仕度く滞阪すること相成申候

大正十三年四月三十日消印

兵庫県氷上郡竹田村中竹田 西山泊雲様 御侍史

東京市外中野町上ノ原八〇五 森田恒友

拝啓 此間は久々にて拝眉嬉しく存候 唯々ゆる／＼御清談もなし不得事残念に存候何分とも展覧会事務員としての際不悪御仁願入候 翌夜御舎弟に再び拝姿数時御懇談いたし候 お耳に入れ候淀川帖（新緑帖となり居候）は自慢云々のほどのものに無く候も 年代記念の意味にて御懇情も願ふ貴下の有と願ふつもり候 お送り候途中不安につき御来東を仕上申候 これより薄暑の好季に向ひ候来月あたり如何に候や 御心配被下候小宅病人も幸に異状なく快き方に有之候 実は小生帰宅早々少し腹をいため引籠り遂々御消息を怠り申候 とりあへず 草々 四月二十九日 恒友 西山泊雲様 御坐下

大正十三年六月十日消印（はがき）

兵庫県氷上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京市外中野町上ノ原八〇五 森田恒友

御手紙拝しながら少々不沙汰いたし御返事延引失礼申上候 アララギ只今外へ参り居るもの多く且つ小生手元のものも切り抜きなどいたし居り揃ひ得るだけとり集めて見申べく候 とりあえず御返事のみ、御上京御

待申居候 六月九日 ハガキにて失礼御免ひて存候可れゆる／＼

大正十三年十月十二日消印

兵庫県氷上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京市外中野町上ノ原八〇五 森田恒友

拝啓 其後御無沙汰致候 秋雨の鬱陶しき折から御障りもなく大慶に存じ上候 秋の拝眉を楽しみ居りました處 段々遅延にて汗顔に存じます事情を申上て御了察を願上ます 例の愚父の病氣も何分此處一ヶ月位が危険らしき医師の言により 遠く旅することに不安を感じて過般来出しぶつて居ります 度々斯かることをお耳に入れともなく遂ひ／＼御無沙汰致候 申上て恐縮に存じますがか何分愚情御寛察を仰ぎます 経過次第によりては冬に入りても一度ぜひ参遊し度存じます 私も近來いろ／＼事情にしばらく旅行もせず従つて画作の遅々たるのを遺憾に存じて居りますが近く拜上出来れば何かせめて愚作を見て頂くことにし度く存じます 先日の御手紙 花の帖のことも心にかゝつて居ります とりあへず お詫を申上ます 御躰をお大切に願上ます 草々 十月十一日 恒友 西山泊雲様 御机下

大正十三年十月二十一日消印（はがき）

兵庫県氷上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京市外中野町上ノ原八〇五 森田恒友

御手紙拝見申上候 来月初旬御来京の由にて拝眉楽しみ居候 御待申居候 小生事情に追はれ不本意に過し居候 汗顔に存候 拝姿の上申居候 十月二十一日 昨今涼気身に沁み申候 御躰御大切に願上候

大正十三年十月二十三日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京府下中野町上ノ原八〇五 森田恒友

拝啓 今日松茸拝手申候 難有御礼申上候 今年は特に貴く賞味いたし  
申候 来月御来京ぜひ御待申候 此度御尋ね被下候愚父幸に目下少  
しく安静 乍憚御休意被下度候 委細拜眉万縷致候 とりあえず 御礼  
迄 勿々 十月二十二日 恒友 西山泊雲様 御机下

大正十三年十一月十二日消印（はがき）

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京府下中野町上ノ原八〇五 森田恒友

拝啓 先日は誠に御粗末失礼申上候 あの翌日御来事あるかと心待ちい  
たし居候へしが、残念に存候 実は其の一日後久しぶり芋銭氏来訪あり  
候も生憎国元へ病父見舞に参り居り面晤を得ずしまつ 重ね々残念に  
存候 日増向寒の折から御自愛祈上候 草々

大正十三年十一月十三日消印

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京府下中野町上ノ原八〇五 森田恒友

先日は御粗末にて汗顔に存候 御願申上候 十便十宜写真早速御送りを  
得 嬉しく存じます 大形のよさも得られ候はば至妙には候へども あ  
れだけでも結構にて厚く御礼申上ます 猶大雅印刷一枚も難有落手 あ  
れはちと骨ばき方の大雅と存ぜられ候が 名手の風格、好参考に御坐候  
十便十宜帖の二名家の対比は誠に後世の吾々に示教多きものにて候 先

日は久し拝眉に係らず下らぬ御話など申上しようにて汗顔に存じます

ほほづき図遂ひ差し出しはせしもの、何やら自信なき点あり後日再考  
の事に願って置きます とりあへず御詫旁々御礼迄 草々 十一月十三  
日 恒友 西山泊雲様 御坐下

大正十三年十二月十九日消印（はがき）

兵庫県水上郡竹田村中竹田 西山泊雲様

東京府下中野町上ノ原八〇五 森田恒友

拝啓 昨日黒豆ありがたく拝手申上候 御礼申上候 歳末御察忙中御厚  
情多謝に至り上候 よき年御迎へ被遊度念上候 草々 師走十九日

### 解題

森田恒友（二八八一—一九三三）の有力な支援者として、芝川照吉（一  
八七一—一九二二）、鹿島龍蔵（二八八〇—一九五四）、田代与三久（一  
八七一—一九五四）らと並び、西山泊雲（本名・亮三 一八七七—一九  
四四）が上げられる。兵庫県丹波の酒造業を営む西山は、『ホトトギス』  
に寄稿する俳人でもあった（註一）。

西山家には西山泊雲宛恒友書簡が百八十九通所蔵されており、二人の  
交遊がそれによって詳しく辿れる。二〇一九年開催の『森田恒友展』図  
録（註二）にそのうち六通を掲載しているが、他の書簡も、恒友と同時代  
の画家研究のために貴重な記録であるため、本紀要に分載してそのすべ  
てを翻刻することとした。本稿はその初回として、大正八（一九一九）  
年から十三（一九二四）年にかけて恒友から西山に送られた書簡を紹介

するものである。

大正八年六月から十二月の書簡においては、平福百穂と恒友による共同の画帖を西山が依頼する内容である。西山と美術家たちとの交流は、大正四年の高浜虚子による子規輪読会で百穂と親しくなったことがきっかけであったこととされている(註3)。その後西山はとりわけ小川芋銭と深い親交を結び、この際の百穂・恒友画帖の題字を依頼する候補者の中に、芋銭の名前も見える。すでに西山と恒友が、俳句を介して共通する人脈を持つ関係であったことが分かる。

大正九年十月、恒友は小杉未醒、倉田白羊、長谷川昇、山本鼎、足立源一郎とともに日本美術院を脱退する。そのときに一同で印刷したと思われる挨拶葉書も西山に届けられている(図1)。

図1 院雲脱退通知



図2 泊雲居



この十月末に恒友は初めて丹波竹田の西山宅を訪れる。泊雲居と名付けられた家は、西山の酒造場に隣接し、平福百穂、小川芋銭、小川千穂、石井柏亭なども訪れた瀟洒な庵である(図2)。恒友はその後北近畿地方を巡ったようで、十一月五日には丹後久美浜、八日には竹野で描いた絵葉書を西山に宛てて送っている(口絵3)。九日には竹田の西山宅に戻ったと思われる。この際の旅行の様子は、『ホトトギス』の翌年正月号に「三丹の印象」として挿絵付きで紹介された(註4)。行程をそれによって補うと、丹波竹田から大江山の麓を歩き、日本海側の宮津へ向かう。天橋立に宿を取った後、乗り合い自動車を使って蕪村の住んだ与謝郡を周り、野中を経由して城崎温泉に宿泊。切濱、竹野に数日を過ごし、竹田の泊雲居に戻る、というものであった。丹波から丹後、但馬をめぐる大旅行となった。なおこの旅行には、俳句関係者と思われる山名一二ともう一人が同行している。またその帰途には奈良に旅行、秋篠寺と唐招提寺付近を散策したという。およそ半月後の十一月十四日に東京の自宅に戻っている。

次いで恒友は十一月二十一日に《閑庭》を西山に送付、十二月十五日には代金を受け取っている。この年五月の聖徳太子記念美術展覧会に水彩《湖畔閑庭》を出品しており(註5)、その作品の可能性もあろう。その後も度々西山が恒友に作品を依頼し、買い上げる様子が登場する。

大正十年から十一年にかけては恒友の体調が思わしくなく、また十一年夏には画室を新築、代々木上原から中野上ノ原に転居するなど多忙で、西山とは書簡のやりとりだけであった。《房総帖》《三丹帖》という画帖の構想についても記されているが、完成したか定かでない。この間、黒豆、小豆、松茸といった丹波名産や、西山の家業ならではの酒粕を贈られたのに対する礼状も含まれる。

十一年一月には恒友は院展を脱退した仲間とともに春陽会を結成しているが、西山に報告したのは大正十二年一月であった。この際と、翌月に小品を一点ずつ送付している。

春陽会は、毎年五月に東京で展覧会を行った後、大阪にも巡回している。恒友が大阪展の実務者として毎年訪れるようになったことで、西山と会う機会が増えたようである。大正十二年の六月、大阪の展覧会場に恒友を西山が訪れたと思われ、その後恒友は滞在先の西照庵から西山に宛てて、京都を経由して丹波を訪れたいという手紙を送っている。しかしそれはかなわなかったと思われる。秋にも再訪が予定されたが、関東大震災のために中止になった。

十三年四月にも恒友は春陽会大阪展に赴き、出品する水墨作品が東京展には間に合わず、大阪展に出す予定でそれを西山に贈る旨伝えている。いまだ震災の混乱が収まらず、目録の完成も遅れていることも記す。結局この水墨は完成できなかったが、大阪展会場に西山が駆けつけたよう

で、会って《淀川帖(新緑帖)》を見せ、西山に譲るとしている。

秋十一月には西山が東京の恒友を訪ねたが、折悪しく埼玉の実家に義父の見舞いで留守にしており、会うことが出来なかった。その翌日は芋銭も恒友を訪ねたがこれも会えなかったと報じている。

この年には、恒友の所蔵する『アララギ』を西山に貸したり、また西山の所蔵する《十便十宜図》の写真図版を恒友が借用するなどもしている。恒友が丹波を訪れたことをきっかけに、画家と支援者というのみならず、絵や文学について語り合う友人として親交が深まっていったことを感じさせる。

(ますぶち きょうこ)／専門学芸員

## 註

- (1) 恒友の支援者の概要については、増渕鏡子「森田恒友の支援者たち―会津と丹波を中心に」『森田恒友展』図録 埼玉県立近代美術館 福島県立美術館 二〇一九年 一六二―一九頁 に報告している。
- (2) 前掲(1)図録、一八〇―二頁 に六通 翻刻掲載。
- (3) 北畠健編『芋銭・泊雲 来往書簡集』西山裕三 二〇一八年
- (4) 森田恒友「三丹の印象」『ホトトギス』第二十四巻四号 一九二二年一月 一四五―一五四頁
- (5) 「展覧会月評」『中央美術』第六巻 第六号 一九二〇年六月 一一〇頁

本稿の執筆にあたり、西山裕三氏、森田恒之氏のご高配をいただきました。記して御礼申し上げます。

兵庫県丹波で酒造業を営んだ西山泊雲 (本名・亮三 1877-1944) は、画家・森田恒友 (1881-1933) の有力な支援者であった。本稿では、恒友から西山に宛てた189通の書簡を翻刻して掲載し、その交遊について紹介する。第一回目は1919年6月から1924年12月にかけての47通である。

1919年6月の書簡によれば、西山は平福百穂や俳句の関係者を通じて恒友と知り合ったようである。画帖の依頼などのやりとりを経て、1920年10月末には恒友が丹波の西山宅を訪ねる。このとき恒友は丹後地方、天橋立、城之崎温泉にも旅行する。11月には《閑庭》を西山に買い上げられる。

この間、恒友は小杉未醒、倉田白羊らとともに日本美術院を脱退、1922年には新しい洋画団体、春陽会を結成する。1923年6月の春陽会展から、恒友は実務者として毎年大阪に赴く。二人は1923、1924年には、大阪の展覧会場で会い、交友が深まる。

Morita Tsunetomo: Transcription of Letters to Nishiyama Haku'un (1)

Masubuchi Kyoko (Curator, Fukushima Prefectural Museum of Art)

Nishiyama Haku'un (1877-1944) was the penname of Nishiyama Ryozo, a sake brewer and haiku poet in Tanba, Hyogo Prefecture who was a major patron of the painter Morita Tsunetomo (1881-1933). This publication, the first in a series transcribing 189 handwritten letters that Tsunetomo wrote to Haku'un, presents 47 letters covering the period from June 1919 to December 1924 and explores the two men's artistic and personal relationship.

According to a letter from June 1919, Haku'un seems to have been introduced to Tsunetomo through the painter and poet Hirafuku Hyakusui and other haiku figures of the time. At the end of October 1920, Tsunetomo visited Haku'un's house in Tanba following an exchange of letters about a painting commission. On the same trip, Tsunetomo also traveled to the Tango region, visiting the Amanohashidate Sandbar and Kinokawa Hot Springs. In November, Haku'un purchased the painting *Kantei* (*Quiet Garden*) from Tsunetomo. During this time, Tsunetomo left the Nihon Bijutsuin Japanese-style painting society along with Kosugi Misei, Kurata Hakuyo, and several other artists. In 1922 they formed a Western-style painting society, the Shun'yokai. Starting with the first Shun'yokai exhibition in June 1923, Tsunetomo travelled to Osaka every year. There, in 1923 and 1924, he met Haku'un and the two men deepened their friendship.